

l f . . . もしも

～森の発電所～



原作・脚本 福田 哲男

上演時間 約 20 分

あらすじ

小学校の頃に、大きな停電を経験した少年たちは、光と人々の笑顔を取り戻すために科学者になろうと決意する。もしも・・・ぼくが科学者だったら・・・私が科学者だったら・・・音をエネルギーに変える発電機を作りたい。そのクリーンなエネルギーは、世界中の人々や自然を救うことができるだろう。

少年・少女たちの夢は、現実となりつつあった。

キャスト

- ・ナレーター 1～4 程度（長い文章なので分けて読んでも可）
- ・博士 A・B・C（多人数での上演の場合、それぞれのチームリーダーとなります。少人数の場合、博士 A のみとなります。）
- ・助手 1～6（人数によって調整してください）

○イントロダクション 少年の日の夢

* BGM スタート（静かなピアノ曲）坂本龍一氏他

* ナレーター登場。

* 脚本の最初と最後にある長い文章なので、数人で交代して取り組んでもよいと考えます。

* 話の出発点となるのでゆっくりと確実に観客に伝えるようにしてください。必要であればマイクを使用します。

* ナレーター 舞台中央に立ち一礼。静かに日記を開き、読み始める。

ナレーター その日、ぼくたち（わたしたち）の町は大規模な停電で暗闇に閉ざされてしまった。歩道橋の上から見える景色の中に、光というものがなくなっていたのだ。点灯しない信号。屋根瓦が落ちた家々。人々の長い列が続く真っ暗なコンビニ。並んでいる人の顔からも光が消えてしまったように思えた。

ナレーター ぼくたち（わたしたち）は、不安な気持ちを胸に家路を急いだ。そのとき、真っ暗な空を横切るきれいな流れ星を見たんだ。

ナレーター 流れ星が消えてしまわないうちにと、みんなでとっさに祈った。神様、僕達を科学者にしてください。この町とこの町に住むみんなに消えない光を

ナレーター

届けたいのです。

もし・・・ぼく（わたし）が科学者になれたら・・・自然のエネルギーを研究します。自然の力で、みんなの生活を守りたい。この願いが叶いますように・・・。祈り終わると同時に流れ星は夜空に白い一筋の光の糸を引きながら、真っ暗な森の向こうへ消えていった。

*ナレーター、礼をして静かに退場。

*幕が開く。

*BGM終了。

○音の発電機

*背景は研究室を想定。博士らしき人物が机の上の機械（昔の蓄音機の形に似ている）を調整している。機械の近くにはランプがおいてある。

*複数のチームで演じる場合、それぞれのチームの机の上に同じような機器がある。

*この脚本には、博士3人に複数の助手をつけていますが上演する人数によって各チームへの助手の配分や台詞・演技を割り振ってください。

*効果音（ラジオのチューニング音）

*効果音終わる。

博士A

よし！これでいい。ついに完成したぞ。

博士B

世界初のエコロジカル発電機。

博士C

名付けて・・・

博士A

音声発電機キコエール1号。

博士B

同じく音声発電機キコエール2号

博士C

同じく音声発電機キコエール3号

助手全

バンザーイ！バンザーイ！ *助手たち拍手で完成を祝う。

助手1

やりましたね博士。おめでとうございます。

助手2

苦労したかいがありました。ね。

助手3

音をエネルギーに変える画期的な発電機！

*助手たち、それぞれの発電機を指さしながら。

助手全

音声発電機キコエール1号・2号・3号

助手全

お～！！

博士全	みんな、よくがんばってくれた。 *博士たち、それぞれのチームの助手の労をねぎらう。 *出演者全員、客席に向かって
全員	バンザーイ！バンザーイ！ *博士たち、舞台中央え考え深く上を組み、空を見上げる。
博士A	思えば長い道のりだった。
博士B	昔々・・・我々が小学生のときに見つけた流れ星が・・・。 *博士B、指でゆっくりと流れ星を追うしぐさ。
博士C	私たちの願いを叶えてくれたのだ。
博士A	諸君！早速試運転だ！
博士B	まずは、発電機の集音装置を南に向けてみよう！
助手全	了解！キコエール1号・2号・3号、南に向けてセ～ット！ *助手たち、それぞれの発電機のラップ部分を客席の左側に向けてセツト。
博士全	スイッチ、オ～ン！
助手全	スイッチ、オ～ン！ *助手たち、スイッチを入れる。
博士全助手全	音よ～集まれ～～～～！ *発電機のランプがゆっくり点滅する。 *ラジオのチューニング音（録音・効果音） *交通量の多い道路の音がする（録音）
助手4	いいぞ、いいぞ。何か聞こえてきたぞ。
助手全	キコエール・キコエール・・・。
助手5	博士！音のレベルがどんどん上がっています。 *道路の音がどんどん大きくなる。それにもないランプの点滅が速くなり、チューニングの音が大きくなる。
博士C	いか～んスイッチオ～フ！
助手全	いか～んスイッチオ～フ！ *助手たちスイッチを切る。道路の音とチューニングの音・ランプが消える。
助手6	博士、どうしたのでしょうか。音が大きすぎたのでしょうか？
博士A	いや・・・あの音では電気を作り出せないのだ。

助手1 博士なぜですか？大きな音で、メーターも振り切っていましたよ。

博士B 生きる力が感じられなかったのだ。

博士C この発電機は、生命が持つ微妙な周波数を電気に変えるシステムが組み込んである。

助手2 なるほど・・・生きる力。

助手全 ・・・・生きる力。
*助手3、何かを思いついたように手を打つ。

助手3 博士、それでは集音装置を生きる力があふれる場所に向けたらどうでしょう！

博士A 何・・・生きる力があふれる場所とな？

博士B それはどこかな？

博士C 何か名案があるのかね？
*助手たち、集まって相談を始める。

助手4 生きる力と言えば外せない場所があります。

助手全 私たちにお任せください。

助手5 あの世界ならぜ～ったい！

助手6 生命力バツグン！

博士全 キコエール1号・2号・3号・おすすめの場所にセ～ット！

助手全 おすすめの場所にセ～ット！
*助手たち、客席右側にそれぞれの集音装置を向ける。

博士全 スイッチオ～ン！

助手全 スイッチオ～ン！

博士全助手全 音よ集まれ～！！
*ラジオのチューニングの音がする。
*教室の音（子どもたちの笑い声や話し声、賑やかな教室の様子を録音した音）がする。
*ランプがゆっくり点滅する。
*教室の音、チューニングの音が大きくなるにしたがってランプの点滅が速くなる。
*出演者全耳を押さえる。

博士全 やかまし～～い！スイッチオ～フ！

助手全 やかまし～～い！スイッチオ～フ！

*音が消え、点滅も終わる。

博士A

なんという騒音、いったいどこなんだ？

助手1

す・・・すみません・・・。〇〇小学校の〇年〇組（自分たちの教室）の休み時間です。

博士B

・・・まあ・・・確かに元気で生命力があふれているが、この装置と周波数が合わない。

博士C

担任の先生もたいへんだ・・・。

○森のささやき

*博士全・腕を組み、舞台中央に進んで空を見上げる。

*助手全、発電機を点検している。

博士A

音を電力に変えることは無理なんだろうか。

博士B

もし、音から電力を作り出すことができたら・・・。

博士C

私たちが子どもの頃に見た流れ星は・・・。

博士A

白い光の糸を引きながら・・・。

*博士たち、昔見た流れ星の軌道を追う。

博士B

真っ黒な森の向こうへ消えていった。

博士C

あの日、歩道橋の上で見た流れ星は・・・。

博士A

あの森の向こうへ消えていった。

*博士たち、パッと顔を見合わせて。

博士B

もしかしたら・・・。

博士A C

そうだよ！

博士全

諸君！森だ！！森へ集音装置を向けるんだ。

*助手たちそれぞれの配置につく。

博士全

キコエール1号・2号・3号・森に向けてセ〜ット！

助手全

キコエール1号・2号・3号・森に向けてセ〜ット！

*助手たち、集音装置を客席中央上空に向ける。

博士全

森に向けてスイッチ、オ〜ン！！

助手全

森に向けてスイッチ、オ〜ン！！

博士全助手全

音よ、集まれ〜〜！

*チューニングの音がする。

*森の音（風で葉がこすれ合う音。小鳥のさえずり等の効果音・録音でも可）が聞こえ出す。

助手1 博士、森の音ですね。

*やがてチューニングの音は消え、森の音とBGM（ピアノ曲）が重なり合う。

*森の音、フェイドダウン。BGMのみ流れる。

助手2 きれいな森の音が、音楽になりました。

*発電機に取り付けたランプが点灯（ついたまま）。

助手3 博士、やりました。電気が生まれました！

助手4 実験成功です！

博士A おお！音から安定した電力が発生したぞ！

博士全助手全 バンザーイ！バンザーイ！ *博士・助手喜び合い、しばらくメロディーに耳を傾ける。

助手5 なんてすてきな曲だ・・・。

助手6 博士、エコロジカルな発電機に必要なだったのは・・・。

助手全 森の音だったのですね。

博士B おっほん。諸君。本日、我々は大切な発見をしたようだ。

博士C 森の音、すなわち森のささやきは、我々に生きるためのエネルギーを送る発信源だったのだ。

助手1 森のささやきがエネルギーになったのですね。

助手2 なるほど、〇年〇組じゃ、うるさすぎたのですね。

博士全 その通り！

助手3 森が作り出していたのは新鮮な空気開けじゃなかったのですね。

博士全 その通り！

助手4 今年のノーベル賞は私たちの研究に決定ですね！

助手5 ノーベル賞の賞金は、山分けですね。

博士全 その通り・・・のはずはないだろう！

博士A ノーベル賞の賞金は私のものだ！

博士B 何を言う！私のものだ～！

博士C じゃ、3人で分けよう！

博士全 うん、そうしようそうしよう。

助手全 それはいいですよ～私たちにも分けてくださいよ～！

博士全	や～だよ～ん！
助手全	は～か～せ～！ *そのとき、助手5が、上空に流れ星を見つけ指で追う。
助手6	博士！流れ星です！
博士全助手全	おおお～。特大の流れ星だ。 *出演者全員、とっさに手を組んで、流れ星に向かって祈る。 *少し、間を置いて
博士A	さあ諸君。次なる仕事が待っているぞ。
博士B	もうっと大きなエコロジカル発電機を作ろう。
博士C	森のささやきをたくさんあつめるのだ！
助手全	了解！がんばります！ *助手たち、組み立て作業に取りかかる。大きめの集音装置を取り出し たり、ランプの点検をしている。 *ナレーター登場
ナレーター	もし、ぼく（わたし）が科学者だったら・・・森のささやきをエネルギー に変える発電所を作りたい。そのクリーンなエネルギーは、ぼくたちの町 から世界中に広がり、人々の生活や生命、そして、大切な地球の自然を救 うことができるだろう。もし、ぼくが、科学者だったら・・・。 *BGM大きくなる。 *幕が閉まる。 *BGM終了。

解 説

現在、子供たちが身を置く環境の中では、大きな舞台で劇を演じる機会が少なくなっています。もちろん、その教育的効果から伝統的に劇を学校行事の中に位置づけている学校もたくさんあります。忙しい学校現場で劇に取り組むことは容易なことではありません。練習の時間と場所が必要です。さらに子どもたちが意見交換ができる話し合いの場も確保しなければなりません。少人数でも大人数でも上演が可能で、子供たち自身が工夫できる劇を考えてみました。

原案の段階では、ぼく（後の博士）が一人で語り始め、音声発電機を1つの研究所で開発する予定でした。

しかし、「複数のチーム」で劇を成り立たせることができれば大人数で取り組むことも可能だと考えました。チームごとに意見を出し合いながら練習を進めたり、それぞれ特色のある音声発電機キコエールを作ることも可能でしょう。

もちろん、少人数で扱うのであれば原案通りでよいと思います。ただし、台詞を精選して一人に負担がかからないようにしてください。

衣装の工夫

博士は、先生方が理科の実験のときに着るような白衣。助手たちは色合いをそろえた上着やセーター等を着るとよいでしょう。もちろん普段着でも可。

小道具としてキコエールを必要数だけそろえます。

[ネット上で見かけた写真です。ご参考までに。](#)

本シナリオの使用と著作権について

本シナリオは、学陽書房より出版されている「わくわく児童劇シナリオ3」に掲載した作品に新たに加筆・訂正を行ったものです。著作権は福田哲男にあります。無断利用及び二次配布は固くお断りいたします。ご利用される場合は、必ずご一報ください。

◎連絡先 pasotea@gmail.com

また、演劇コンクール等で上演許可証を必要とする場合は、メールでお知らせください。できるだけ速く対処いたします。

2019/03/24 福田 哲男